

F・H・ブラッドリーによる関係の否定とジェイムズ哲学 —純粋経験論から多元的宇宙論への発展の軌跡—

大厩 諒

(中央大学兼任講師)

ウィリアム・ジェイムズ (1842-1910) は、1904 年から翌年にかけて書かれた複数の専門的な論文において、自身の哲学を体系的に構築しようとした。これらの論文は彼の死後、高弟 R・B・ペリー (1876-1957) の編集によって『根本的経験論』(1912) として出版された。このなかで世界の根源的なあり方として提示されるのが「純粋経験」である。これは、主観・客観、物理的・心的という区別がなされる以前の形而上学的な素材である。この純粋経験がほかの純粋経験の系列と関係をもつことで、われわれの日常的な経験、物理的事物や心的現象が成立するとされる。

こうした純粋経験論に対しては、当該論文の刊行直後からさまざまな批判が寄せられた。そのなかには、ジェイムズの学生であった D・S・ミラー (1868-1963) と B・H・ボード (1873-1953) による次のような批判もあった。すなわち、ひとつの経験が複数の関係をもつことは不可能ではないのか、経験がどのようなものであるのかは、それがどのように経験されるかに依存しているのだから、ひとつの純粋経験が複数の系列と関係し、別様に経験される時、その経験はもはや同一の経験とは言えないのではないかというものである。

この批判の背景には、イギリス観念論の代表的人物として当時大きな影響力をもっていた F・H・ブラッドリー (1846-1924) が展開した、関係否定の議論がある。ブラッドリーの批判の要点は、「関係」という概念は矛盾を含んでおり、関係項同士を結びつけられないというものである。一方で、関係を、関係項から独立したひとつの実在だとすると、関係と関係項をつなぐ新たな関係が必要になり、無限後退に陥る (外的関係の不可能性)。他方、特定のものとは結びつくことがその関係項の内部構造によってもたらされていると仮定しても、何が内部構造を特定のものとは結びつけるのか依然として不明であり、加えて、関係項の内部構造同士が、どのように「ひとつの」関係項の内部構造として統一されるのかも不明である (内的関係の不可能性)。こうして、ブラッドリーによれば、関係は、どのように考えられたとしても存在論的な紐帯ではないとされる。

ブラッドリーがこのように関係を否定するのは、実在が単一の個体であるとする自身の実体一元論を展開するためである。関係や関係項は、単一の個体である絶対者という全体のなかの分節された部分としてのみ、その地位を認められるにすぎない。

こうした関係否定の議論は、ジェイムズの純粋経験論にとってまさに致命的であ

る。なぜなら、それは、一片の純粹経験が数的同一性を保ったまま複数の脈絡で異なる機能を果たすことを不可能にし、物心の区別を同一の純粹経験の振る舞いの違いとして説明しようとするジェイムズの企図を根底から覆しかねないからである。それゆえ、ジェイムズは、関係項の独立性と自己同一性とを保持しつつ、ほかの項とも結びつくことのできる関係の可能性を擁護する必要があった。

しかし、ジェイムズがブラッドリーの議論を正面から批判した「事物とその諸関係」論文（『根本的経験論』第3章）における関係の擁護は不十分なものである。ジェイムズは、関係が変わっても関係項自体は同一のままであることを主張するが、ブラッドリーの議論によれば、いやしくも関係項がいくらかでも関わるならば、関係項はもちろん内的に影響を受けざるをえない。総じて、ジェイムズの議論は、関係の成否そのものが問題になっているにもかかわらず、関係の成立可能性を先取りしてしまっている。

こうした不十分さを解消し、またミラーとボードによる批判に答えるためにも、新たな展開がジェイムズには必要であった。それを記録しているのが、「ミラー - ボードの反論」と名づけられた草稿である。これは、『根本的経験論』に収められた諸論文と『多元的宇宙』（1909）とのあいだの時期（1905年の秋から1908年2月）に書かれたものである。

この草稿における議論は、『根本的経験論』における純粹経験論を、ブラッドリー、ミラー、ボードによる批判から救い、この草稿のあとに書かれた『多元的宇宙』第5講へとつながるものである。つまり「ミラー - ボードの反論」は、ジェイムズ哲学が多元的宇宙論を本格的に展開していく起点となるものである。

このように、本研究では、ブラッドリーとの対決や「ミラー - ボードの反論」の検討といった、これまで十分に研究されてこなかったテキストの吟味を通して、ジェイムズの哲学的思索の展開をより明確かつ総合的に見極めることに注力した。